

アイヌ民族の生活は全て自然に依存していましたが、なかでも狩猟の獲物を与えてくれる山々や、そこから流れ出る無数の河川は飲み水や最も大切な食物だった鮭漁をするため、とりわけ大切な場所でした。



山々の物語

佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

山を管理する神はもちろんキムンカムイ、つまり^{ひぐま}熊です。熊にもいろいろ位があり、最高位の神はヌプリノシキコロク(nupuri-山 noski-中央 kor-を掌握する kur-神)という特別な呼称があり、一番高いところに住んでいるとされます。また、山は高いところの大部分が神の住む聖域とされ、人間が狩猟等で立ち入ってよいとされていたのは裾野の三分の一程度でした。

山も川もアイヌ民族にとっては、魂のある生き物同様、喜怒哀楽があると捉え、人間と同じような伝説が多々残っています。

なかでも非常にダイナミックなのは、雌阿寒岳と雄阿寒岳の夫婦喧嘩のとぼちちりを受けた十勝山系のオッタテシケ山の話です。

雌阿寒岳と雄阿寒岳は一对の夫婦山とされ、釧路市周辺から北方を眺めると、一際際立って見える秀峰は、他の山々を従えているかのような存在感があり、堂々たる威厳ある山の姿から、世代を超えて信仰の対象にもなってきました。

この夫婦山は、他もうらやむ相思相愛の間柄にあって、しっかりものの良妻である雌阿寒はよく家のきりもりをし、夫である雄阿寒には少しも不自由や不満を感じさせないよう気遣っていたのでした。そうした恵まれた状況にもかかわらず、慢心した雄阿寒は、他のあわれな女性に手を差し伸べて援助したくなったのです。あげくは、つい熱が入りすぎ、いつも自分が彼女のそばに居てやらなければならないという思いで、心のおもむくままに行動し始めました。

そうした状況にしっかりものの雌阿寒も嫉妬心を増

幅させ、その憤まんがついに爆発、夫が愛用する槍を雄阿寒に対し投げつけました。しかしながら、槍を持つことも投げること未経験の雌阿寒が満身の力で投げつけたことで、

槍は雄阿寒を通り越し、方向も逸れて、十勝連峰北端のオッタテシケ山に当たり、その向こうに飛んで行きました。オッタテシケの山頂が一部欠けたようになっているのはそのためだそうです。オッタテシケのアイヌ語の意味も物語そのままです(op-槍が ta-そこで teske-逸れた 知里真志保『アイヌ語入門』北海道出版企画センター、2004年、58頁)。また、この雌阿寒岳の怒りがあまりに激しかったため、ごく近い摩周湖の場所にあった山が怖れをなして国後島に逃げ出し、その跡が湖になったというおまけまでついています。このお話にはいろいろなバージョンがありますが、今でも噴煙をあげる雌阿寒岳はまだまだ怒りが収まりきらないでいるのかもしれませんが。

オッタテシケ山については、大変面白い歌が残っています。メロディーをお聞かせできないのが残念ですが、語感がリズムカルで、プルプルケというのは日本語のぶるぶる震える様子を想像させます。

「オッタテシケ(optateske-オッタテシケ山が)プルプルケ(purpurke-ブルブル震えた)ニシクルカタ(niskur-雲 ka-上 ta-で)カニポンチェツポ(kani-金の pon-小さな cheppo-魚っこ)カムイエシノツ(kamuy-神々が esinot-で遊ぶ)エフーン(e hun-エフーン)」。

この歌のなかの「金の小さな魚」というのは、溶岩が煮え立ぎっている様子を表現したものだそうで、実に豊かな表現力だと感じます。旭川地方では、神(熊神)に聞かせがいのある名歌として、熊送りのときには盛んに歌われていたそうです。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大學北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~12』(北海道教育委員会、2008~2021年)等。